見本

理論と実践をつなぐ

教育心理学

杉本明子・西本絹子・布施光代 編

みらい

見本

まえがき

本書は、大学の教職課程で学ぶ学生や、教育心理学に興味を持っておられる初学者に向けて書かれたテキストです。本書を読まれる方が、教育心理学の基本的理論や概念を理解し、教育に関わるさまざまな事象や支援について心理学的視座から考察できるようになることを目指しています。

本書は、主に次のような特徴を持っています。

⑴教育心理学の理論がどのように教育実践に関係しているのかについて考えていただくために、第１章から13章までの各章の最初に「学びの入り口」を設けました。「学びの入り口」では、各章のテーマに関連するさまざまな教育現場の事例を取り上げており、具体的にどのように取り組めばよいのかについて心理学理論に関連づけながら考察する糸口を提供しています。

⑵教育現場で起こっている問題に対応できるように、「認知･学習」「学級集団」「臨床」「障害」などのテーマについて実践的な支援に関する内容を盛り込みました。日々子どもたちに向き合っておられる教師や教育関係者の方々にとっても役立つ情報になることを意図しています。

⑶教職課程の学生が効果的に学ぶことができるように、第１章から13章までの各章の最初に「学びのポイント」を明示しました。また、各章ごとに「ミニットペーパー」（出版社（株）みらいのホームページ：http://www.mirai-inc.jp/→「書籍サポート」からダウンロードもできます）が用意されており、学生自身が学んだことの振り返りや重要事項に関する知識の確認ができるようになっています。「ミニットペーパー」は、小テストとしてもご使用いただけます。なお、小テストの解答は上記「書籍サポート」に掲載してありますが、スマートフォン等で同頁にあるQRコードを読み取れば、その場で解答を確認することができるようになっています。

⑷教員採用試験の参考書として役立つように、近年の教員採用試験で出題された重要語句・人物を網羅的に取り上げています。また、各章の初めに「キーワード」を設け、重要語句・人物が一覧できるようになっています。

⑸教育心理学に興味を持っていただけるように、第１章から13章までの各章の最後に「コラム」を設けました。「コラム」では、各章のテーマに関連した興味深いエピソードを紹介しており、一般的な読み物としても楽しんでいただけることを期待しています。また、教育心理学についてさらに深く学びたいと考えておられ

見本

る方のために、各章の最後に「さらなる学びのためのブックガイド」も設けてあります。

⑹教育心理学の伝統的な理論とともに最近の研究動向も紹介し、新しい時代の教育の在り方について考えるための有用な情報を提供できるように配慮しました。

⑺教育心理学について先行知識がない読者にとっても理解しやすいように、できるだけ一般的な用語を用い、読みやすい文章で説明するように心がけました。また、専門用語や補足的な内容に関しては側注で解説し、図表や写真も多く取り入れています。

本書が、「教育心理学とは何か」について学ぶ入り口になると同時に、「人間の行動と変容の背後にある心理とはどのようなものか」「教育はいかに人間の発達と学びに寄与できるのか」という知の探究の入り口につながることを願っています。

最後に、本書の編集に多大な労をお執りいただいた（株）みらい編集課の西尾敦氏に心より感謝申し上げます。

2019年２月

編集代表　杉本　明子

見本

目次

まえがき

序章　教育心理学とは

第1節　教育心理学の定義と領域　12
1　教育心理学とは何か　12
2　教育心理学の領域　13
第2節　教育心理学の歴史　15
第3節　教育心理学の研究方法　17

第1章　発達の基礎

第1節　発達とは何か　23
1　発達の原理　23
2　発達を規定する要因　26
第2節　人格発達の基礎　29
1　フロイトの心理性的発達理論　29
2　エリクソンの心理社会的発達理論　31
3　アタッチメントの理論　34
COLUMN　39

第2章　認知・思考の発達

第1節　ピアジェの認知発達段階理論とその後の展開　42
1　ピアジェの認知発達段階理論　42
2　ピアジェの理論のその後の展開　46
第2節　ことばの発達　50
1　コミュニケーションの道具としてのことば　50
2　思考の道具としてのことば　51
第3節　ワーキングメモリの発達　53
1　ワーキングメモリとは　53

見本

2　ワーキングメモリの発達と教育　54

COLUMN　56

第3章　学習意欲と動機づけ

第1節　欲求と動機づけ　59

1　欲求とは　59

2　欲求と動機づけの関連　60

第2節　学習に対する動機づけ　61

1　学習意欲　61

2　学習動機に影響を及ぼす要因　64

COLUMN　70

第4章　学習理論と教授・学習指導法

第1節　学習理論　73

1　行動主義学習理論　74

2　認知主義学習理論　78

第2節　授業形態と学習指導法　84

1　行動主義／認知主義学習理論に基づいた指導法　84

2　協調学習　88

COLUMN　93

第5章　学習につまずく子どもの認知と指導

第1節　ディスレクシア児の認知・行動特性と学習指導　96

1　学習障害（LD）とは　96

2　ディスレクシアの定義・出現頻度と読み書きの行動特性　97

3　ディスレクシアのサブタイプと認知特性　98

4　ディスレクシアの脳神経学的基盤　100

5　ディスレクシア児への学習支援と読み書き指導　101

第2節　学習のつまずきの原因と指導　103

1　メタ認知　103

2　スキーマ　105

3　記憶の特性　106

COLUMN　109

見本

第 6 章　知能・創造性・学力

第 1 節　知能　112
1　知能とは　112
2　知能の捉え方　113
3　知能検査の変遷　113
4　知能は個人間差から個人内特性へ　115
5　知能理論　116
6　知的能力の発達　120
第 2 節　創造性　121
1　創造性とは　121
2　創造性の理論モデル　121
第 3 節　学力　123
1　学力と学業不振　123
2　RTIモデル（指導に対する反応モデル）　124
COLUMN　126

第 7 章　パーソナリティと自己

第 1 節　パーソナリティの理論　129
1　パーソナリティの類型論的理解　129
2　パーソナリティの特性論的理解　131
3　ビッグファイブ（パーソナリティの 5 因子モデル）の展開　133
4　力動論（フロイト）と場の理論（レヴィン）　135
第 2 節　青年期における自己とアイデンティティ　136
1　青年期の特質と発達的意義　136
2　自我と自己　137
3　アイデンティティの形成　137
第 3 節　自己に対する評価と感情　139
1　青年期を彩る否定性　139
2　肯定的自己評価の様相　140
3　感情から見た青年期の理解　141
COLUMN　143

見本

第8章　アセスメントと教育評価

第1節　子どもの問題をどのように理解するか　146
1　アセスメントによる対象理解　146
2　アセスメントの方法　147
第2節　フォーマル・アセスメント　149
1　性格検査　149
2　知能検査・発達検査　152
第3節　インフォーマル・アセスメント　154
1　行動観察による評価　154
2　面接による評価　154
3　行動所産物による評価　155
4　三項随伴性（ABC分析）　156
第4節　教育活動を評価するための方法　157
1　伝統的な教育評価　157
2　新しい教育評価の方法　160
COLUMN　162

第9章　社会性の発達と多様な人間関係

第1節　人間関係の広がりとその質的な変化　165
1　人間関係の広がり　165
2　人間関係の質的な変化　166
第2節　人間関係の中で育っていく「ちから」　167
1　周囲の人を分かっていく「ちから」　167
2　周囲の人と生きていく「ちから」　170
3　より良く生きていく志向性としての「道徳性」　171
第3節　人間関係の中で直面する問題と子どもの発達　174
1　問題を乗り越えての発達　174
2　多文化共生の中での発達　176
COLUMN　178

見本

第10章　学級集団

第 1 節　学級集団づくり　181
1　学級における集団の特徴・機能・発達　181
2　学級集団の査定　184
第 2 節　教師の学級集団への影響　187
1　教師の子どもへの影響力　187
2　教師の学級経営　188
第 3 節　学級集団への不適応予防と対応　192
1　学級集団への不適応　192
2　学級集団への不適応の予防策と誤解　192
3　学級集団への不適応に対する対応策と課題　194
COLUMN　196

第11章　困難な状況にある子どもへの支援

第 1 節　子どもの発達支援としての教育実践　199
1　教師に求められる子どもの発達支援の役割　199
2　カウンセリング・マインドを生かす支援の在り方　200
第 2 節　学校における危機への支援　201
1　小 1 プロブレム　201
2　不登校　202
3　いじめ　204
4　非行・暴力行為　208
5　児童虐待　209
COLUMN　211

第12章　心理臨床

第 1 節　ストレスと適応　214
1　ストレスとは　214
2　ストレス対処に関わる心の働き　214
3　ライフサイクルとストレッサー　216
第 2 節　幼児期・児童期・青年期における心の問題　217
1　心の問題とその原因　217

見本

2　幼児期に見られやすい心の問題　217
3　児童期から青年期に見られやすい心の問題　217
4　心の問題を見つけるためのサイン　219

第 3 節　カウンセリング　220
1　カウンセラーの姿勢　220
2　カウンセリングの立場　221
3　傾聴の基本的技法　221

第 4 節　心理療法と心理相談機関　222
1　心理療法とは　222
2　代表的な心理療法　223
3　心の専門家や外部機関との連携　227

COLUMN　229

第13章　特別支援教育

第 1 節　特殊教育から特別支援教育へ　232
1　はじめに　232
2　特別支援教育で始まった取り組み　233
3　インクルーシブ教育システムと合理的配慮　233
4　個別の教育支援計画と個別指導計画　234

第 2 節　身体障害児の特性と支援　234
1　視覚障害について　234
2　聴覚障害について　235
3　肢体不自由（運動障害）について　237
4　病弱・身体虚弱について　238

第 3 節　知的障害児の特性と支援　239

第 4 節　発達障害児の特性と支援　241
1　発達障害の定義と分類　241
2　LDについて　241
3　ADHDについて　242
4　ASDについて　243
5　DCDについて　245

COLUMN　248

引用・参考文献　251
索引　266

見本

第1章

発達の基礎

◆学びの入り口～教育現場の事例から考えてみよう！～

事例：“頭はいい”のに簡単なルールに従えず暴力的な子ども

小学校通常学級２年生の男児Ａ君は、勉強は良くできます。知識も豊富で、遊びでも、難しいゲーム類や囲碁・将棋はずば抜けて強く、担任のＸ先生も周りの子どもたちも「Ａ君は、頭はいい」と認めています。しかし、友だちは少なく、休み時間も一人で過ごしているか、保健室に行っています。自分の思うようにならないと感情が爆発し、暴力的に振る舞い、暴言を吐きます。例えば、当番の仕事から逃げて行こうとするのを、「最後までやってよ」と他児に注意されると、「抹殺する！」と叫びながら椅子を２、３個蹴飛ばし、上靴を投げつけます。また、手洗いの順番に並んでいるとき、早く洗いたくて、前で手を洗っているＹさんの両脇から手を差し入れて洗おうとしました。Ｙさんに「やめて！」と言われるとＹさんを殴ろうとし、それを止めようとしたＸ先生の顔をひっかいてしまいました。

Ｘ先生は「頭はいいのに、どうして簡単なルールが守れないのだろう。生まれつき何らかの課題があるのか。家庭環境や親子関係の問題だろうか」と悩んでいます。

◆ワーク：次の問いに対してあなたの考えをまとめてみよう

１．教師には子どもの学力を伸ばすと同時に、発達を支援する役割があります（第11章参照）。Ａ君にはどのような力が育っていないと思われますか。

２．Ａ君の問題の原因にはどのようなことが考えられるでしょうか。

◆ワークに対する考え方・ヒント

発達には、身体・運動、認知・言語、対人・社会性などの多様な側面があります。認知・言語などの知的発達だけが適応を保障するわけではありません。また、子どもの発達は、遺伝的な要因と環境の要因が相互に関連して現れます。環境の要因には、家庭や親子関係のみならず、毎日直接関わる全ての場や人、および間接的な環境要因があり、それらを広く振り返ってみることが必要です。

見本

学びのポイント

- 発達を理解する際に必要となる、基礎的な枠組みや概念を理解する。
- 人格発達に関する基礎理論（フロイトとエリクソンの理論）を理解する。
- 発達を推し進める基盤となるアタッチメント（愛着）についてその基礎を学ぶ。

キーワード

□生涯発達　□発達段階　□遺伝と環境　□初期経験・臨界期・敏感期
□生態学的環境　□フロイトの心理性的発達理論
□エリクソンの心理社会的発達理論　□アタッチメント（愛着）
□ワトソン　□ゲゼル　□ローレンツ　□フロイト　□エリクソン
□ボウルビー

第1節　発達とは何か

1 ── 発達の原理

1．発達の定義

「発達」ということばを聞くと、どんなイメージが浮かぶだろうか。「青年期や若い成人期が人間としての全盛期で、子ども時代はそれに向かってぐんぐん上っていき、中年期以降は衰えて坂を下り続け、死を迎えて地平に着地する」といった、山のような像を思い浮かべることが多いかもしれない。しかし「発達」の考え方では、青年期が完成体にあるとは考えない。人は、生命が芽生えた時点から、初めて出会う変化に絶え間なく向き合いながら終局に至る存在である。**発達**とは、受胎から死に至るまでの心身の量的・質的な変化の過程（**生涯発達**）を指す。**量的変化**とは、「身長が伸びた」「ことばの数が増えた」のように、量で表すことのできる変化である。**質的変化**とは、思考の仕組みや社会性の発達のような、量的変化だけでは捉えることのできない変化である。

また、単に獲得（「多くなる」「できるようになる」）だけが発達ではない。発達とは、消失することによって新たな力が獲得されたり、質的な変化が起こったりする、**獲得と消失**[1)]を繰り返す適応のプロセスである。例えば、生後6カ月以前の乳児は、世界中の人のことばに含まれるあらゆる音韻を弁別することができるが、それ以降は母語にはない音韻を区別できなくなる。例えば日本語を母語とする環境にある乳児は、10カ月頃には、[l]と[r]の違いを区別する能力が消失する[2)]。しかし、そのことにより、日本語の音韻体系に即した音韻知覚が発達し、母語としての日本語を効率よく獲得することができるのである。

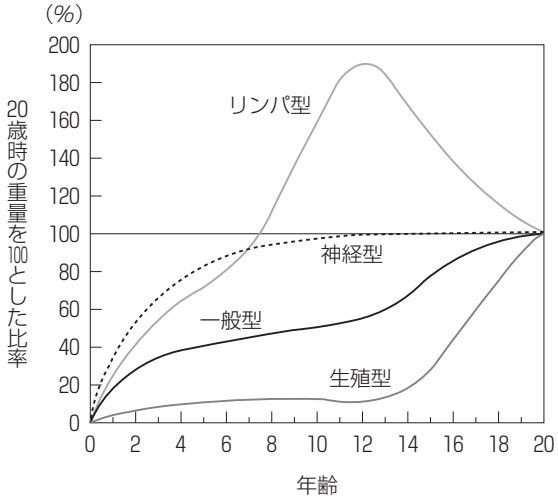
見本

2．発達の一般的な特徴

発達（変化）には一定の順序があり（**順序性**）、身体発達は頭部から尾部へ、中心部から周辺部へという**方向性**に従う。発達は途切れることなく連続（**連続性**）しているが、現れ方は必ずしも均一ではない。例えば量的変化を示す**スキャモン**（Scammon, R. E）**の発達曲線**（図１－１）によれば、脳は12歳頃までにほぼ成人並みの重量を持つが、生殖器官は12歳までほとんど変化がないなど、発達のスピードが異なる（**異速性**）。発達には一般的な法則はあるが、**個人差**があり、また典型（定型、健常）発達と非典型（非定型、障害）発達と明確に二分されるものではない。

ある心理的機能の構造が変容し、前後の時期とは質的に非連続なものになる場合、これを質の異なる一つの段階として区切り、時系列的に現れるとしたものを**発達段階**と呼ぶ。発達段階の現れ方には個人差があるが、順序は変わらず、文化の影響を受けずに現れる（**文化普遍性**）とされる。代表的な発達段階論に、後述するフロイトやエリクソンの発達論、ピアジェの認知発達論（第２章参照）、コールバーグの道徳性の発達論（第９章参照）などがある。発達段階を次へと進むためには、現在の発達段階において十分な発達を遂げなければならない。なお、それぞれの段階において遂げるべき課題を**発達課題**と呼ぶ。

発達課題という概念を、生涯発達という視点から捉えたのは**ハヴィガースト**（Havighurst, R. J.）である。ハヴィガーストは、人生のそれぞれの時期において達成すべき課題（条件）を、表１－１のように提案した。



スキャモンは出生後の身体各部の発達をその発達曲線によってリンパ型･神経型･一般型・生殖型に４分類した。
リンパ型：胸腺、リンパ腺など
神経型：脳、神経細胞など
一般型：呼吸器、循環器、筋や骨など
生殖型：睾丸、卵巣、子宮など

図１－１　スキャモンの発達曲線

出典：Scammon（1930）：山内（1989）[3)]

見本

★さらなる学びのためのブックガイド★

・藤永保（1982）『発達の心理学』岩波書店

ルソーに始まる発達思想の変遷を縦横無尽にたどりながら、現在の発達心理学の原点となった諸理論の意味・意義について、幅広い観点から語られている。子どもは教育によってどれだけ変わり得るのか、という問いをじっくり考えたい読者にお勧めする。

・アドルフ・ポルトマン（1961）『人間はどこまで動物か―新しい人間像のために―』岩波書店

コラムに挙げたトピックの著である。古い著作だが、「（動物の一種である）『ヒト』として生まれた子どもは周りの人々との関係のなかで『人』になる」こと、まさしく人の発達の特徴が、動物の進化の過程から描き出される名著である。

・鑪幹八郎（1990）『アイデンティティの心理学』講談社

エリクソン理論の入門編としてお勧めする。

・数井みゆき・遠藤利彦編（2005）『アタッチメント―生涯にわたる絆―』ミネルヴァ書房

アタッチメントについて学びを深めたい読者にお勧めする。

Educational Psychology

見本

ヒトの発達の特殊性：生理的早産

動物学者ポルトマン（Portmann, A.）[19] は、哺乳類は、出生直後から十分な感覚能力を備え、成体に近い形で自立して親の後を追って走ることができる動物（**離巣性**）と、感覚器官は閉じられ毛も生えておらず、また移動する能力もなく、親の保護を要する動物（**留巣性**）の2つに分類されるとしました。離巣性の動物には、ウマやクジラ、サルやチンパンジーなどの高等な哺乳類が当てはまります。彼らは妊娠期間が長く（50日以上）、一度に生まれる子どもの数は少ない（1～2頭・匹）が、長く母胎にとどまることで、高度な段階まで発達して誕生し、生命を自分で守ることができます。留巣性の動物にはネズミやウサギなどの下等な哺乳類が当てはまります。彼らは妊娠期間が短く（20～30日）、一度に多く（5～22匹）の子どもを産み、親が保護します。すなわち、より高次に進化した動物であるほど離巣性に傾くという法則が認められる、といいます。

そうであるならば、ヒトという最高に進化した哺乳類は、誕生直後から自由に歩いたり、明瞭に外界を見たりと、最高度の離巣性を示す状態で生まれるはずですね。ところが、ヒトの新生児は極めて無防備で、大人の手厚い保護を要し、出生後約1年を経てようやく歩行ができるなど、留巣性の状態で誕生します。ポルトマンは、離巣性の動物として生まれるにはあと1年胎内に留まるべきところ、早く生まれることが通常化したためだとし、この状態を**生理的早産**と呼び、**二次的留巣性**としました。生理的早産の理由としては、胎児の大脳の進化（巨大化）と人類の二足歩行開始（骨盤の変化や母親が胎児の重量を支えられないこと）が考えられています。

生後約1年間の乳児は、生理的早産による**子宮外胎児**ともいえます。そのことは人間の発達に大きな意味をもたらしました。親子関係の長期化による、生後の生育環境への適応とアタッチメントの形成です。乳児は「無力」とはいえ、人にアプローチするための特殊な能力をさまざまに持ち合わせています。人の言語音に敏感であったり、抱かれた際に自分を抱いている人の顔の辺りに目の焦点が合ったりします。乳児は周りの大人の手厚い世話を引き出すために、例えば「泣き」という手段で、頻繁に「関わって！」というサインを発し、大人はそれに対して、乳児の情動を読み込んだり、くみ取ったりしてことばを発しつつ関わります。そうした養育者との密な相互交流を通して、生まれ落ちた環境の中で言語・コミュニケーションの力を獲得し、知的発達を遂げ、養育者とのアタッチメントが形成されていくのです。

◆第１章ミニットペーパー

年　月　日（　）第（　）限　　学籍番号＿＿＿＿＿＿＿＿　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

見本

本章で学んだこと、そのなかで感じたこと

理解できなかったこと、疑問点

TRYしてみよう

①人は受胎してから（　）に至るまで発達する。

②発達とは、獲得と（　　）を繰り返しながら環境に適応していくプロセスである。

③ワトソンは、人の人格やさまざまな能力は生後の経験（学習）によってつくられる、という（　　）説を唱えた。ゲゼルは、（　　）に達する以前の経験（学習）は、遺伝的に定まっている発達の経過を変えることはない、と主張した。

④ジェンセンの環境閾値説の考えによれば、例えば、楽器の演奏における極めて高い技能は、（　　）が最適であるときに遺伝的な素質が発揮される。

⑤人の場合、特定の能力の発達には臨界期的性格を持つ時期である（　　）期があるが、後の経験によって回復や変化が可能であることを、発達の（　　）性という。

⑥生態学的システム理論の考えによれば、例えば、子どもが通う学校が背後に持つ環境としての教育委員会は、（　　）システムとして、子どもに影響を及ぼす。

⑦フロイトによれば、口唇期・肛門期・（　　）期という乳幼児期の経験が、（　　）経験として、人の発達にかけがえのない重要な意味をもたらす。

⑧エリクソンが生涯発達の中心的な課題であるとしたのは、青年期における（　　）の獲得である。

⑨アタッチメントとは、危機的な状況の際に特定の他者に近接し、それを通して、自らが「（　　）であるという感覚」を確保しようとする行動制御システムである。

⑩アタッチメントは、（　　）性に富んだ相互交流をし、温かく（　　）してくれる人に対して形成される。